

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：34416

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12531

研究課題名（和文）東北アジアの歴史展開に青海チベット仏教寺院ネットワークが果たした役割に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Role of the Qinghai Tibetan Buddhist Network in the Historical Development of Northeast Asia

研究代表者

池尻 陽子 (Ikejiri, Yoko)

関西大学・文学部・准教授

研究者番号：50795044

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、青海地方のチベット仏教寺院が明清時代の中国やモンゴル高原にまたがる広範な東北アジア地域においていかにネットワークを形成し、どのように機能していたかに着目するものである。

成果としては、まず明清期中国の青海チベットに対する施策の連続面と断絶面を明らかにした。明代からの朝貢関係を下敷きとした青海寺院との関係においては、形式的には多くの要素を明代から継承しつつ、中央チベットやモンゴルへの影響力を高める人材を確保しようとした。また、本研究では清代南モンゴルのチベット仏教都市フフホトと青海僧・寺院とのネットワーク形成について、16・17世紀のチベット仏教浸透の経緯とともに位置付けた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義としては、チベット語・満洲語・モンゴル語・漢語といった多言語の、それぞれに系統の異なる史料（仏教関連史料、行政文書など）を用い、従来の研究では「モンゴル史」「中国史」あるいは特定の「地方史」として個別に論じられてきたテーマを、「東北アジア地域のチベット仏教ネットワーク」という超域的な枠組みで再考した点である。

また、社会的意義としては、上記の広域的視点を青海というバウンダリーエリアに主軸を置いて論じること、これまで認知されてこなかった東北アジア地域の歴史の構造や力学を新たに提示し得た点である。

研究成果の概要（英文）： This study focuses on how Tibetan Buddhist monasteries in the Qinghai region formed networks and how they functioned in the Northeast Asian region spanning China and the Mongolian plateau during the Ming and Qing era.

As a result, this study clarified the continuation and discontinuity of Ming and Qing China's measures against Qinghai-Tibet. Regarding the relationship with Qinghai monasteries, which was based on the tribute relationship from the Ming Dynasty, it tried to secure human resources who could influence Central Tibet and Mongolia while inheriting many elements from the Ming Dynasty in terms of form. In addition, in this research, I positioned the formation of a network between Hohhot, a Tibetan Buddhist city in Southern Mongolia in the Qing Dynasty, and Qinghai monks and monasteries, along with the background of the penetration of Tibetan Buddhism in the 16th and 17th centuries.

研究分野：中央ユーラシア史

キーワード：青海チベット仏教寺院 駐京チベット仏教僧 転生化身高僧 清朝 フフホト チャンキャ

1. 研究開始当初の背景

本研究は、14～20世紀における青海地方のチベット仏教寺院が隣接する南モンゴルや中国など東北アジアの諸勢力といかなる関係を構築していたのか、そのネットワークの範囲と性質、形成過程を明らかにし、それが当該時期の東北アジア史の展開に及ぼした影響を検証するものである。現代の民族問題にも多大な影響を及ぼしている清朝のチベット仏教政策の実態と有効性、限界を評価するためには、政策の担い手となった清朝治下のチベット仏教僧たちの属性を多角的に研究する必要がある。かかる認識のもと、清朝最初期に重用されたチベット仏教僧たちの出自が青海東部であったことを究明し、彼らが先駆けて清朝チベット仏教界の礎となったことが、後に同じ青海地方の転生高僧であるチャンキヤラへの厚遇に繋がり、清末に至るまで清朝チベット仏教界の上層部を形成していたことを指摘した。つまり青海チベット仏教寺院の人的繋がりが、清一代を通じて王朝のチベット仏教界の中核を支えていたのである。これらの研究成果は、なぜ清代に青海諸寺院と王朝の間にこのような関係が生じ、機能したのかという、新たな、本質的な問いを導き出し、本研究課題設定に至ったものである。

2. 研究の目的

近年青海地方は研究対象としてかつてない注目を集めている。しかし、そこで中心的に用いられてきたチベット語二次文献の多くは18世紀後半以降成立したもので、その記述には誤りや17世紀半ばのゲルク派政権樹立以降の状況を過去に遡及させがちであるという問題点がある。以上に鑑み本研究では、明・清時代の一次史料の積極的な活用により、17世紀半ば以前の状況を再構築することを目指す。また、中国を中心に比較的研究の多い18世紀以降の状況についても、チベット地域はチベット研究者が、モンゴル地域はモンゴル研究者が研究対象とし、双方の研究成果を共有することなく、分断的に研究される傾向が未だ強く残っている。今、それぞれの研究蓄積を有機的に繋げ立体的な歴史像を提示する研究が求められており、これは多系統多言語史料から東北アジアの交界を描こうとする本研究の負うべき課題である。

3. 研究の方法

検証にあたっては、この分野への利用が遅れている満洲語・モンゴル語・チベット語の一次史料の活用、王朝交替や地域の別によって個別に扱われてきた事柄を相互に関係づけ全体像を構築することにより、緻密且つ視野の広い歴史像の提示を実現させる。

本研究が扱う対象は、近代国家形成期においてチベット仏教教団とその思想がその動向を大きく左右した地域であり、その直接的な素地が形成された時代である。それらの交界に位置し、宗教活動や時には政治的活動によってそれぞれの社会に影響を及ぼしていたと思われるのが、青海のチベット仏教寺院ネットワークである。よって本研究は、東北アジアにおける近現代の社会・民族問題を理解するための堅実な基礎研究と成りうるものである。

4. 研究成果

(1) 青海チベット仏教寺院と明・清王朝について

清朝最初期のチベット仏教界が青海東部寺院のグループによって牽引されるようになった背景として、それ以前の明朝と青海チベット仏教寺院の関係や、17世紀初頭の南モンゴルへのゲルク派僧の布教活動が影響している。そのため、清朝が彼らに授与した称号は、明朝が同じ青海東部の別の寺院に贈った称号と同一であり、明代の先例を強く意識したものであった。この明朝時代に青海諸寺院に対して発給された称号のスタイルは、清朝時代の扎薩克喇嘛制度(清朝内のチベット仏教寺院・僧を整序する行政的枠組み)における高位職位者に授与するものとして定着していったが(池尻2020)、それはダライ=ラマ政権など中央チベットの諸勢力には適用されなかった。全く同時期に構築されたチベット仏教僧勢力との関係性でありながら、明朝から連続する青海寺院との関係と、清朝が自らの王権の根源とすべく新たに関係を築いたダライ=ラマ政権で、清朝は明確に対応を分けていたといえる。

(2) 青海寺院ネットワークとモンゴルの関係の諸相

青海東部ゲルク派寺院と南モンゴル諸部

青海チベット仏教寺院の施主としては、ダライ=ラマ政権樹立の立役者グシ=ハーンの子孫である青海ホシュート王公たちが良く知られている。しかし、青海に隣接する南モンゴル諸部の中にも青海東部のチベット仏教寺院または僧と深い関わりを有する王公層があり、彼らの施主としての役割も十分に検証されるべきであることは言うまでもない。中でも、16世紀末以降多くのチベット仏教寺院・僧を抱えるようになった南モンゴルの中心都市フフホトの仏教界とは、寺院間の人的繋がりが(師弟関係、本末関係など)が諸史料に散見されるものの、体系的な研究は未

だ行われていない。本研究では、複数の 17-18 世紀の史料（モンゴル語年代記、チベット語高僧伝や仏教史の著作、清朝側檔案史料など）からフフホトの仏教寺院群の形成と相互関係及び青海など周辺チベットの仏教圏との関わりを検証した。

清代に興隆し「フフホトの七大寺」とされた寺院群は、いずれも清朝成立より前にトゥメトモンゴル王公の庇護により建立されたものか、ゲルク派やカギユ派僧が布教及び修行の場として開基したものが淵源となり発展したものであった。清朝はそれらの寺院の上層の僧たちに職位を授与し、一見官僚のように整序したかのようであるが、実際には青海などから布教に来たチベット僧やモンゴル王公の子弟で出家したものが座主として就任していた状況を追認する形で職位を授与したものである（Ikejiri 2019）。

モンゴルにおける大国師チャンキヤの権威浸透について

青海の名刹グンルン僧院の転生高僧チャンキヤの系譜は、先行研究において清代南モンゴル仏教界の最高権威であると位置づけられてきた。中国の研究者たちの多くは、清朝が民族統治政策の一環として、北モンゴルの宗教権威ジェプツンダンパに対抗させるためにチャンキヤに南モンゴル仏教の統括を委ねたと論じてきた。しかし清朝がどの程度意図的にそうした状況を作り上げたのか、或いは結果的にそのような状況が醸成されたのか、権威浸透の経緯については未だ十分に検証されていない。

チャンキヤの系譜の清朝史上の登場は、(1)で述べたような青海東部寺院ネットワークの明代からの活動によって生じたものである。そして、チャンキヤの南モンゴル仏教界を牽引する地位の確立は、ドロンノールや熱河といった京師の扎薩克喇嘛制度と関わりの深い東部モンゴル地域での国師としての活動に加え、清代南モンゴルの拠点都市であるフフホトにいくつもの末寺を形成し、当地の僧と師弟関係を取り結んだことが大きく影響しているといえる。そうしたフフホトにおける活動が可能であったのは、単に清朝内最高位の国師としてのチャンキヤ本人の権威のみならず、(2)で述べたような青海の僧院とフフホトとの 17 世紀初頭からのネットワーク形成が下地としてあったからこそである（Ikejiri 2019）。

今後、アラシャン=ホシュート部や北モンゴルも視野に入れ、青海チベット仏教僧院ネットワークの広がりを検討していく必要がある。その上で、中央チベットと清朝も含めた前近代チベット仏教世界の見取り図を描きなおしうる手応えを本研究によって得ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 池尻陽子	4. 巻 53
2. 論文標題 清初扎薩克喇嘛制度的形成 从内外庫倫体制到多庫倫体制	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東西学術研究所紀要	6. 最初と最後の頁 3~11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 3件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 池尻陽子
2. 発表標題 乾隆18年、ジェドゥンホトクトへの「慧通禅師」号授与の勅諭
3. 学会等名 チベット語歴史・宗教文献講読会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yoko Ikejiri
2. 発表標題 Trans-regional connections in the formation of the Buddhist status in Hohhot
3. 学会等名 the 15th Seminar of the International Association for Tibetan Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池尻陽子
2. 発表標題 清代宮廷チベット仏教僧たちの帰属意識
3. 学会等名 関西大学史学地理学会大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池尻陽子
2. 発表標題 關於乾隆時期清朝派遣駐京喇嘛到伊犁政策的探討
3. 学会等名 首屆藏學交流工作坊（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池尻陽子
2. 発表標題 2018 年夏 青海寺院調查報告
3. 学会等名 チベット学情報交換会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池尻陽子
2. 発表標題 清廷におけるチベット仏教儀礼について：帝后喪事を中心に
3. 学会等名 2018年度東西学術研究所第14回例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池尻陽子
2. 発表標題 北京の學問僧院：雍和宮及被其引來の人們
3. 学会等名 内亜与海洋：明清中央档案、地方文書及域外史料國際検討会（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 岩尾 一史、池田 巧	4. 発行年 2021年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 360
3. 書名 チベットの歴史と社会 上	

1. 著者名 吾妻 重二	4. 発行年 2019年
2. 出版社 関西大学東西学術研究所	5. 総ページ数 512
3. 書名 東西学術研究と文化交渉	

1. 著者名 原田正俊	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 208
3. 書名 アジアの死と鎮魂・追善	

1. 著者名 森部豊	4. 発行年 2023年
2. 出版社 関西大学東西学術研究所	5. 総ページ数 164
3. 書名 文書・出土・石刻史料が語るユーラシアの歴史と文化 (関西大学東西学術研究所研究叢書)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------